

# 高浜中学校だより

平成 30 年 11 月号 N07

校長室に、用務員さんがいつも季節の花を飾ってくれます。今は、薄紅色のコスモスです。今年の夏、この暑さは今まで続くのだろうか、秋は来るのだろうか、いよいよ日本の四季が壊れるのだろうかと気をもんでいました。でも、このコスモスがちゃんと咲いてくれて私たちの心を和ませてくれています。



さて、学校では秋の新人大会が終わり、次の大きな行事は3年生の学力診断テストです。9月の始業式でも話をしましたが、「焦

らず、目標を持って、計画的に学習」に取り組んできたと思います。その成果が出ることを期待しています。

## 感性を磨く ～職人～

先月の学校だよりでは、「枕草子」や「佐藤忠良さんの言葉」を引用しながら「感性を養ってほしい」ということを書きました。今回はその第2弾として、「職人」というテーマで私の雑感を書かせていただきます。

今、「職人の技」を継承する人が高齢化しているという問題があります。そのひとつとして、「鍛冶屋」をあげてみます。生徒のみなさんは小学校5年生の国語の教科書に「千年の釘にいどむ」という教材を勉強したことを覚えているでしょう。東大寺や法隆寺の改修の際に、千年たってもびくともしない釘が使われているのです。その釘を造った職人の話です。今私たちが目にする釘は大量生産されたもので手軽に手に入りますし、さほど気にとめることもありません。しかし、日本の国宝を守る改修には、一本の釘を千年もたせるための「技」が必要とされます。その造り方はインターネットで検索しても出てきません。またAIを駆使してもその釘ができるかどうかわかりません。釘に配合される砂鉄の分量くらいはわかっても、その釘の強度は職人の「感性」によります。その感性を身につけるには、やはり長年の経験が必要なのです。その職人である白鷹幸伯さんも80歳を過ぎておられます。この技の後継者はどうなるのか気になります。

あるとき、外国人が「大工」の修行をしているテレビ番組を観ました。そのなかで外国の人は、「材木の特性を生かした家造

り」に魅せられたと言っていました。外国の人から見ると日本人が培ってきた「職人の技」というものに特別な魅力を感じるようです。

今後、みなさんが生きていく中で職業を選択します。人に流さ



れることなく、また、給与のみをいちばんに考えるのではなく、「やりがい」や「いきがい」を考えることも忘れないでください。

白鷹さんは、最初は家業の「鍛冶屋」を継ぐことから逃げていたそうです。そんななかある人との出会いが人生を変えました。その白鷹さんの言葉が心に残っています。「『千年先の職人にいい仕事をしているな』って言われたい。」と。

## 情報モラル講演会

スクールプランのひとつに「情報モラル教育の推進と啓発」をあげています。その取組として、11月17日（土）に「親子で聴く情報モラル講演会」を計画しています。今やインスタグラムやSNSというのはみなさんの身近なところにあり、その楽しさや便利さはここで説明するまでもありません。同時に、その恐ろしさもみなさんは

ある程度は理解していると思います。しかし本当に大丈夫でしょうか？

保護者の皆様におかれましても、スマホなどをお子さんに持たせているものの、お子さんが事件に巻き込まれないだろうか、また、ゲームに熱中しすぎないようにするにはどうしたらよいかなど、心配なことがあると思います。今回、情報モラルに関しては、親子で聴いていただきたいと思い土曜日に計画しましたので、是非ご来校ください。

## 美術部表彰

10月28日（日）、高浜町文化会館で「釈宗演 顕彰式・記念講演会」がありました。そのなかで、2年前、本校の美術部が「宗演さん」という紙芝居を制作し、その功績が称えられ表彰していただきました。この紙芝居は、高浜町の全ての小学校で読み聞かせをしておられます。さらには、今年の9月、本校生徒が英語と日本語でこの紙芝居を観光客に披露してくれました。高浜が生んだ偉大な人物の功績を末永く言い伝え、顕彰していくことが私たち町民の責務ではないでしょうか。

自分にできることを高浜町（地域）のために行う、そんな思いで「地域に貢献できる生徒の育成」をスクールプランに掲げています。